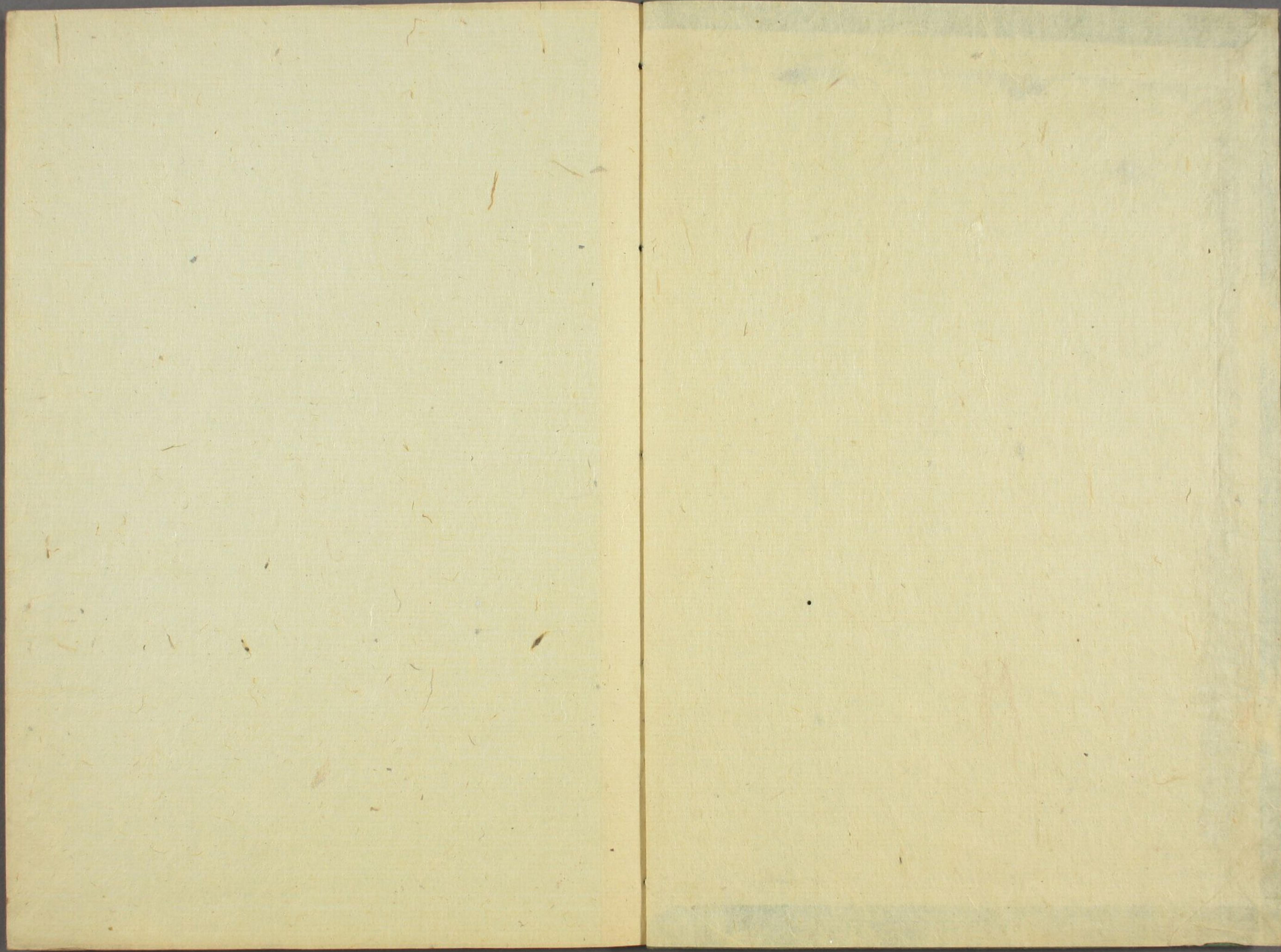


源氏物語序釋

卷八

八

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 5 4 3 2 1



第八花宴 評釋

元興寺文庫

藏書印

舊注 花詞を以て名とすり但その詞より南庭の様は宴をすとありて其の二条のふ

ともの若は宴のふる花筵のふれあひ居候ふとありべしと云ふて卷の名を花筵の宴と云ふ  
ふやとねぢも候まどち來花の宴とハ様を候ぐりをソヒアモト一作。う是ハ禁中は  
幸くされば私の家は宴ありバ於南殿の様は宴をして名目とせりと公得だまつたり

箋名、南殿櫻宴事也則花宴也

新櫻花の宴をさく花の宴と云ふてかくの説あきどりかふくとぞいふとあれ  
ぢ古今集春歌よ様の象よ或ハ詞或ハシテのものも亦様とあくとてちくさくのうちまでを戴  
くう又瑞けい花の象よハ詞すもうちふもほん花とみゆきと見ゆるをきてばぐくふら  
せきやまとを五百年をうりこのうみん人いとよくとせじよやがまよハ花ととりへだ様のう  
などりの説のもあり此説ハ後の人があくりとそりへ古へハうれまだ

国本の名此度の様は宴の字を頃唐書を善くもとめの字をあざとハきれりう花の宴

とぞく。浦氏君二十景の春かうり

報此卷の名ハ南殿の様は宴小うれしくうからうんこすらと様をとむとりかまはけて清  
抄よしあくいれくことあるハ新新よ每へらきくうがでに但新新のきハ「」と云ふ  
のとよりてばね唐の比がさまとハわざもじぬいひがまも此あ後のははもとふうらもりせて  
様をとむのとむいとくとねぢくまきば花の宴といそんふかでふとうあくん史記源  
かも花花宴とぞくをや且この字お名ハ既うもソクイと云ふ紅葉賀よ對てたに  
をかと並べ舉られくまうかとぞだとくもんを却く穢うかるかすもあくべー古今集の花はう

○端



一〇

をうりあがれてとま此を寫よハ日ひとよく晴てとかうりいづきも対すよお夜くらめをとふべし **新**け  
しきめでに細流の法詳いとよくえ出うり実ふれ候事と反對の事法なるべし  
そのたのも **国**上ふ文学の事也ざるよもとハソドあらぐくか事どもあてて宴會トハ詩を作らむ  
稀とときばかりく **玉補**小様ふるゝとあまで今も家下の物に又假り事とを上へめりしてモルトリヘナリガシ  
えんみんあらうく **玉補**小様ふるゝとあまで今も家下の物に又假り事とを上へめりしてモルトリヘナリガシ  
事。とりより一筆もれりと **玉補** 韵の字を一字づて探滑く詩を作らむ各分一字のうえ **新**この作法名新よ是つ  
はてハ各そのよりをやく官姓名何くは字を假るとあらうくうづくらひ容儀もづくらひ本とぞくらひ  
つだふほやれ **玉補**人のめうつしもくあらびとずねのうよせばやべりあ生どそ生ふつけて従ふくも  
ちくといふま **新**めうつしとハ人の目ふくらむく人より圓ふくらむく客儀もど心あらびきと不よく  
めやまくらむく **新**めやまくハ尼苦しき小射ふ清よて見よくあらうくうきをりふこりてあらびみてと  
よくもううなうく **新**カトあらめてハあらうくうくべ容儀を新ふふうすしもく  
まもあんくも **新**こそキサのくくハとりよことこは氏名隠すのあはんをりくらむ  
めうううらむ **花**ちくハ臆病けんうり人のむくする附ハよそへ圓がくらむきだべりてうらうく鼻のくぐ  
ちくとくらむ **新**従もまきバ裏白くも聲をげバ面赤む **新**晴が声もあまそハ往まくるねく情意もあぢし  
せ下の文人もくく **新**堂上の人にももかづらめりがちまくらまくして地下の人へどもハとく **新**てハもづ  
もづくとくりくらむく **新**てへ係る縁も事あるの内ざえりくくくくふくのむづくした牛のうきをくとくらる俟の文法あり  
とあらばうきて且あらうくれものあらうあるうとよせううすら前よちゆくもす店位ひすくざえも  
まくらめり **新**バタフアムを訪ニ作るわざのうへとやまくととあらまど迷惑よらうととやまくととあれど  
の泣ゆ流よら一め翠を浪江の流ハとさうりて附新よそと并せうべー  
とうひいろもくせどものうく **新**地下文人は中少老人の博士どものからあらあやしくもまたやうじを  
常のうあぐくかくはりへめり出でてこくドくうきをとりくあそれよあらびくうづをうくとせをじハ  
きあくぬあらきこさるハ儒者あどりうんかのハそのうとようかくやうくとせのあうくん財かむくまく  
かくふか年老くうがふいとあらきみをうくもきぬだ一生のうれうるとハ食寢窓の姿が常住不斷とな

あれどいとめやさしくありてちがひゆ。そぞう  
くひあど。わみの。すゞきこす。やもの。  
も。れお<sub>臆</sub><sub>モツ</sub>トモラシク。勝<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
せ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>トリコニ<sub>其外</sub>  
堵<sub>モツ</sub>トの文<sub>モツ</sub>トモヤ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
き。ぎれて。おも<sub>鼻</sub><sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>トモヤ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
みうど。あふの。ほざくか<sub>帝</sub><sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
本居翁云。やん<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>キ所<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
賢<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>を<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>て。おも<sub>白</sub><sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>多<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>有<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
あくまき。わらくね<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>り。ふやん<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
文学ノ方ニシテ。ふやん<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>文<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>才<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
ほどば<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>く。やくさんほど。の。中<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>あひで<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
水<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>ツガフニテ博<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>士<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>イ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>み<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
ひ。げあり。まおつるも<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>せどもの。あ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
イワクサウ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>形<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
わ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>やくまく。もいたれ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>もあもも<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>ふ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
也<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>。は<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>だんを<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>りくら。が<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>樂<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>  
チキ<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>。襄<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>平生<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>馴<sub>モツ</sub><sub>トモラシ</sub>

まうべー上のゆかやづりて音とり  
ことともがたうらこ **新** 此説いぐ  
唐字ハ聲字へ係る字あうべー紅  
葉を聲字ふゆわきうびんうの字を  
ある准へくとえし **新** 紅葉聲  
てふとふもかくむれて出も  
まこと文あり

東ひがうねもせて **新** 東ひる  
氏君のねねふ葉の財お声のゆもと  
おげ、出らきて挿頭カサレの花を賜ひ  
て袖アラマツ下すよ拂西をキーマク  
絶えとハヘーて令賜うすず責  
とハ遁きぐく知れうそと  
きてのどんせりへとそろを

**堀** 源ひづきの聲とも見てぞ一さ  
あう **新** つはふハ一ううとゑの向  
て舞ふる春をも惜れ未を階上かて  
除ひゆひきゆうが、さくあえ  
うきうきせく舞りふあまうりけ  
しきぞうりあんもいうじゆん片  
一をれとハ一疊をりふと/or此樂大曲  
こそむとハ十四疊も、とつあれ  
ぞそきぐすれ一五のとへき

ちうともいひづきのとやん  
とみたけのとやん  
しげく舞ふ御流あくの舞と  
もぐくとあるはつて上ふものも  
えづくとつましいとおりくさん  
ゆうとあきへ春うき鶴あまと海  
あたのをや

左のとく **箋** こぶせな肩とちう  
うめきもよきとせきく

**細** 菓美とふくさりうちめを歌む  
ふくめとさやうの方をもおこ  
もれよ

ひやおいでるくとあきばく  
細 わがかくの身のほれうてあれ  
ば何とぞおもひぞとあこ **詠** 东  
あめのこまくあらへー

林ふ苑といまひと **河** 此舞樂

國 波羅門僧正持來 女形也其姿  
如吉祥天女舞体柔軟而靜之而已  
云云賜御衣一處長例也 **細** 此樂  
上古ハ舞ありき今ハ新故と云く  
今すく一すゑにて **細** ほりく  
念此小まよ **花** ぐくまよ 管絃  
樂 打てて右の二絃をうす

三

卷之二

いは舞、体柔々静くあれど  
いとあざれ、意うかへふをばら  
久一ゆゑへかくすりやと  
ハ若うやうふはがきの事もあんと  
かくて用ひてあれうござう考へて  
あへむあへと

おふらよのむすびと見えやうがおも  
ひのゆきやくらあくさんま。  
りでわきんねイ え な  
漏

華竟

くるよきものあれ店あるを  
退散

シニ  
ヅク  
カレ  
ニ

モモロキ日醉

月ノケニキテ  
うれしもうちやすくよしむか

オモヒガケ  
まぬれどて。わざわねまひあわやある。

ナイトキニ  
カルベキ 間隙

△ レヤウニ  
イトナレ 窺

を披瀝する所は、途中から方丈の文書をうちて、あらかじめさへ、書いた

不候の事無事中年もやうて御ともがくらふとあり  
の事やといへば人ども被満しもとどりとひき又不候

仰せられ候やといふと之をされど、されば宗祇が松は改めより後江入林を不徳あれ  
とぞとぞ

秀逸あり。かく各處までて達頃中、半もやうの作えど、  
草木花々相生のやうじらひのやも臣民を光すよしわたり

**釋**者つゞは氏名す内因の事なりて、之をかゝつてハム徹後女帝  
ゆもひうるゆうとあやへへ者づらの事なり。是れをいふと云がりうる

かのみうるをとひしゆくふれはりよせんかくすてほほん  
がうまわらうとひうおの下からせんじよくくせいひしおひとねくにさらに

洋の舞をなすのであるが、たゞそのせいか、おもづかず、  
はづくほど考へ念をぐ一 **耶** おのづかたゞの世人多く臣民たる者などとて

細流の如きは、必ずしも、その本筋の筋道の外に、別途の筋道をもつてゐる。この點が、筆の運びの妙だ。

とおもひてゐるハ何んの扱はうともへたまつてりては居あり  
年を寢卸記(寅二月)へ約詩並退出云

**退散** ノ お散退を共ふのより頃ハあらうまで袖を分つまき、自他もうち  
**上文** ノ 上文の結末より前とある「」にてとつておちます。とある「」より前

の名はあらわす。かくして、**御**おやじにてある。かくして、下小屋のあつていろ。

やうふ事あらう時ちよハ御うべきほのうゑのあがと  
王命あらうがひあべー **御**あらうにかへるがへあヒトうゑを傳あらへる傳あ

○ふのえん

弘徽殿のほうどよ

河  
御  
敷  
秘  
說  
云  
忠  
教  
沒

不そどのとく廊の字をとよめく舊記不廻をもそどめと改まること

おのづからずもあきへ  
【居】私共おのづからずもとおきばとの口は戸と各別れ  
お福もうせむひきよのすくはあはるをかとおもひたるもあつまつて  
お福アシテよう後上へがくまくゆ  
をかはあやまちハ  
【居】おのづからずのあやまちあるわおとくわくあくよくふくらむとほ民あひられ

つるぎと日向の火をもとみづくはせんぐ用ひにすまへてあらわす  
やきのうて  
**腰**のうてと、**腰**戸よりへく處の長押ナガレあるを長押の上は一段うきあとのうてと  
下又ふびて下してあふらとつゞいてのうたきよハ處の肉をこぎあせお説きにハいり  
るがくようへき

伊行尺餘 大江千里葉小不晴不暗牒  
新古の集みハ志く拙どう紀へあらはの事半叶似シカニ  
かのゆうとつ向解シテありてハ傳ふれや一譯注シテ之をもる

刺ウと譯を付ハノラのトテアツラヘタヤウニあとの音を足してハシメテ  
あるじつテ **新** もうけのト譯注のトシの事へどうかするハシメハヤシテ彼ともよきぬあれどあやて  
右方の由女ともよきバヒキコトテリテ此難作ゆす例ありム一の由女ナリモハシメベ  
あらきよのまく **新** もうけ月をとめであるとよハサハシメハサハシメナリモハサハシメナリモ

その日うちもがうべにひそて  
上うへ入はれどもあまが  
きよし。おあげまくあくあじふふ  
歎息 ラーテハオクニイトテ

ほどどどのよきもよみがへゆひど。このくちづけ  
廊  
月のすとせんがほりう。秋新  
上局  
金殿ヨリス

まくらにあたれども上手  
がりあせてさて御月を  
見ゆる。お鳥へ  
テベーツ月と云ふ。日望書あれ

どなまでへあゆまへたりて  
うふへも中はあやからハシム。と  
きりいだむらへ  
【玉浦】よやまとひのむらきよと  
そしで。やまとのぼりてのどれまが。ハシレ  
ソフト 長押上へ  
覗

ふとくらむをひそめ、寝上りやを  
らうとくとも、かくのせ押のふ  
玉一はくかくの下が闇のさき  
もじてさくへをこううとりよ  
たゞぐでのくへとくわゆみ。  
おぼる月わよにくわ  
ヒトホリノ  
角  
△  
か

あにぐ  
珠長押より底の向  
おうひき上のくきをあまへ  
まうひきくわらふへきば  
かのうひきくわらふへきば  
モノカ  
チャツ

〇五

女おもむりとぞくもあつて。あれむく  
ちけ。こもたそ。どみくど。わううとか  
ワル。此誰。ア、リ、キ、  
あまきよれあまれを。まし月のれ  
トホリナラヌ。因縁  
長神下抱下。戸神開  
よひまねまは。まくまく  
をす。やあく。此开  
ワタシハ。此开  
まくは。えれへよゆされ  
ワタシハ。入道召寄、イハ  
とも。あで。すりあへ。まく。あひび  
のじあくよ。ひのんたまく。とせまくめく。  
スコシヘ。源氏。ヒソカニシテヨソ。居候  
いさくながまくもくす。びとぞくもく

一いじうそやくまんといよもち  
がきことと原のよしを  
うき方をよろく 新才の波  
まをりも女ひとよやふまき  
草のふくハ墓のすきを消て  
没せそりよおきばよのあと  
とハトモやよとハあはうより  
ひとかぢなのむねともハほの  
をまごのまふはあへでうてあれ  
せれすまじくまくあくがさ  
ちまひべきやうりあくをふ  
のいじへうですいんぶのまよ  
と恨むくへう 篆あきらふ名と  
兵文傳くまく志のすらぬハ  
あれまくまくはまの実の毒を  
そそに説すでもゆくべき今  
つかざるべくすくと名譽の心  
せうぞくするが、うす

國内、一いじうそやくまんといよもち  
とうかくとし道をかとひ。ほ葉  
の巻ふくはまくが、いませぐれ  
もあざとひ宿の手をりくと  
宿をしやもこれとより、  
とあらればこかくとある

うなづけあくまでもうかんえいだ。心  
おりまきひぢらやも、ちぎりありまむ。  
ゆめ人半分もちをひよ。女もじくす  
ハナサニヤカニテテ ザニネナル  
をやまと。ほんとにもう  
ラヤカニテテ キニテ  
からハユラシ  
うほひに。とねまよぼ  
イソくに。女はや  
ぞれくわく。かちあり。な、あ  
うでりゆく。か  
もぐれ。たゞのまへむ。  
うもくせよやぐ。まゆが、まぐれて  
もあゆふとばとく。とやぶる。りゆふ  
憂文

六〇

とお詫びと申す事  
○ 节の事をバシラフヤシカト  
あるをうやくかかれてやうかと  
あへがひさむじる泡うかて謝  
一うちこの本回注どもえもど  
きぬひがとのよて薄あもまど  
いづれとぞ  
○ おのあとい  
へふを受ておのをどうといひきの  
やうようう小篠がふとけり  
あのかくふ女ものち行をよそ  
へ原おのゆふ人あわせにぎはを  
くふくわからうんとまとおも  
御、おやじとひくこと等  
おへきさんされども立ちやく  
見け入ふ際がふか歎てまどだ  
もつてせめくらげんといふべき  
こくへとくへハ女をきくぞと分え  
とくすふうとせきばこかぶぐく  
そとくよばくとくらうじんごく  
べうらをばべー口注どもひと粗  
くの心をひきこみスモモヤ  
と原氏とハ心中のよつねやあれ  
そあぢれの夜までひざと  
らまきゆきゆきとひんおりハとく

艶ふなまみたる。こゆ、りきや、ばあみぐ  
詞 ほ  
じづきごときのゆきとひんまことさ  
うもん。かくさうど若タニシイヒヌ  
本あざむ。かくさうど。や、ダウシウ  
うともじあく。かくさうど。タヘシタ  
せよまうち。かくさうど。カクサウド  
ぜナクサウド。扇  
証撮  
小毛  
かくさうど。おとく。おとく。小ハ  
伺候  
替  
同  
朝  
タエマ  
ツキ

七〇

まことにあらへしをかかふ事ぞう  
をもうてとりきこへんをもり  
と東坡がわば不用あれば者も  
まろつぐふうう。 桐<sup>桐</sup>主<sup>主</sup>は  
兵主の曲口<sup>口</sup>あふる  
細<sup>細</sup>時<sup>時</sup>やまの後朝あれば<sup>は</sup>まき  
おどりき<sup>き</sup>すよ。 桐<sup>桐</sup>やん<sup>やん</sup>ねほ<sup>ほ</sup>  
つきト<sup>ト</sup>うひつ。 桐<sup>桐</sup>人<sup>人</sup>ひそくよ  
突<sup>あ</sup>ひく<sup>く</sup>かみ<sup>み</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>を寝  
して<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>く  
おひき<sup>き</sup>だ。 桐<sup>桐</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>か<sup>か</sup>で  
女<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>  
民<sup>民</sup>女<sup>を</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup> 桐<sup>桐</sup>寛<sup>寛</sup>  
の義<sup>義</sup>あり  
手<sup>手</sup>を<sup>を</sup>かね<sup>ね</sup>ハ。 桐<sup>桐</sup>せ<sup>せ</sup>男<sup>男</sup>女<sup>女</sup>中<sup>中</sup>  
を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>  
そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>。 桐<sup>桐</sup>源氏の<sup>の</sup>山<sup>山</sup>を<sup>を</sup>情<sup>情</sup>  
蜜<sup>蜜</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>  
す<sup>す</sup>き<sup>き</sup>め<sup>め</sup>。 桐<sup>桐</sup>河<sup>河</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>不<sup>不</sup>毛<sup>毛</sup>  
あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>す<sup>す</sup>み<sup>み</sup>様<sup>様</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>  
あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>す<sup>す</sup>み<sup>み</sup>様<sup>様</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>  
も<sup>も</sup>す<sup>す</sup>。 桐<sup>桐</sup>是<sup>是</sup>不<sup>不</sup>愛<sup>愛</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>  
が<sup>が</sup>づ<sup>づ</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>わ<sup>わ</sup>  
草<sup>草</sup>元<sup>元</sup>教<sup>教</sup>  
彼<sup>彼</sup>女<sup>女</sup>  
藤<sup>藤</sup>ツボ<sup>く</sup>  
歎<sup>歎</sup>息<sup>息</sup>辭<sup>辭</sup>  
カツ<sup>カツ</sup>ベツ<sup>ニ</sup>  
比<sup>比</sup>  
ナラ<sup>ナラ</sup>ニ<sup>ニ</sup>  
至<sup>至</sup>  
隈<sup>隈</sup>  
良<sup>良</sup>  
清<sup>清</sup>  
金<sup>金</sup>御<sup>御</sup>前<sup>前</sup>  
源<sup>源</sup>

R

三

墓へよう。此宗はちひきゆゑと  
文外ふじどうせとひしむての事ハ  
りもく既日おもひゆうともすと  
かきくるかふちりとくまゆうと  
キと極まるハおほのをと昭夜  
の脉と例の法と  
よろびたりがくまれて 新義抄  
源氏の山川がくみあひゆう  
さるくのむとらひうとく候月給  
者つべうどねぐべ  
やくくめくよふあくと 河め  
川の聲くわやもくくわくくわく也波  
良か耳ぬぬく波な久天がやうす  
つまわやくくくよハナリとる波  
しもく下界 佐馬栗律母河  
断ばやくくくわりおハあくとと  
づくを葬のめとおふくとくとく  
珠もおまかふがまくつま  
といふまで湯をくれりひづく  
ゆ潔ふくわくとくとく  
明王の声を宣伏をかんとすくめ  
まくアラヒといふがくまくスーく生  
といふのと近充已上四代をりい

せど。やるもんじきバ。らしもんを  
おぼて。一念院へおもねみよまといとう  
くづかひたりく。あいざやうづく。變  
ノバミルホド  
生 成  
清まくぞくいとくわう。のまゆ  
キマヘ格別  
成 教  
のまよをへなまんとやびふりなひねばし。  
をとれぬをとあきら。すまし人あれ  
キニカルル  
フニギカイ  
半やまびくととあくとくう。彼女あられ  
り。ごのはねれ。ほふかどをくへく  
コアヒタウナ  
金ナシ琴  
暮  
生めとまいの。とくもとくがぼきど。今ハ  
いとまうかへきりく。うりあははま  
ムヤシニハ  
幕  
川縹  
おわいをふはまくのあくとくめん

2

あらまじ。ちとよみ。おがくわふ。  
ツラネントメ 五事  
されく。け争。せひゆきをりて。やくに  
モテアリビモノニメ 回  
ぬあたなして。とうひすふ。お  
ひく。一のけ奥 王  
左大臣  
よもひよく。やいきうの法を界をあんえ  
歴  
驚  
策

眞信公あぐらひとをくハ例の泥  
めを候あり。 **釋** おひよせてもんハ  
ふももべうきでくハ化考のゆゑ  
あきばあひく海をときかはるに  
相をあまし界の野となすの  
えうひと明主ハナのよご  
ふじどもさるさるふ

拾 **詫** ふまの夷邊を驚策と云  
此字あぐべー **玉補** さくやくさくハ  
喜る事あじけ詫又小夷の極句  
うきみ上の毛葉色ぶつうひとど  
いとさやうふとあるが、ハ將じ  
くわのとくわのとく

よそひのぞく **釋** ゆすのゆすん  
をえびて今下の延々やうふるをと  
今俗小命ノセニタクスルといふ  
よそひのぞく **細** ほのりく  
あくこめりゆくみのむとく **釋** け。  
あくとくゆくみをく文をくふ  
てくがいゆくみのゆくみの  
ゆくとくいとく

さきれもわとく **玉補** 繢ヨシ本後紀  
美和十二年正月丁巳天皇召尾張渡  
主於清涼殿前今舞長寿樂舞畢

演主印奏和歌曰於岐那度天  
和龍夜波遠良金久左母支モサ  
可由留登波尔伊天互萬毘天年  
天皇賞歎左也世滅賜御衣一襲  
今罷退このきの泊りてうけく  
臣氏ものまつて榮ゆくまふを  
かよをあへす」バミとのえ  
も此の詞とが基り  
狀のやうれりゆりくふくの光  
公義も殆かひゆきりきくら  
のせ

おやげすふくくふ  
**狀**そくくとつねるふくく詳  
あくも詫おの後もくじりあゆ  
すのとすくり假秋小春と説  
ぎるをくるべからると受するを  
ふふ笑冲の辯けづく字音と  
せむくりと、のまへぢりひもくぢ  
ハ秀の字あぢりづきみても  
功考より上ひあらねのひじもどゑ  
ねれりくまづくはゆくされば  
もやげてくあも公事のこ  
ふりあで相あまふがづくとこ  
くまくまんをもやげてくふづ

まつまつちうどあるもとと  
あひだやひのとをひひひ  
あひだやひとひあひまじま  
でひの文房用ひり細巻  
公方の書類がひり出づくと  
うとあれもひひあひび  
ねややけやひよびくとこれ  
たけすふらびびてへ傳ふ傳  
禁禁あるまじふ後代の伝とも  
國國ひすみの書類を経りし  
ゆゆのよしやく新あふ義  
のほどう後代の伝ともとくハ  
ふ富後上の舞ふら名跡を  
ハラびがねあればこれを後世の伝  
とくべしのとくはおこめすを  
とやかくそれまでとくふ能者  
のかくことわれる。圓すとくとく  
されする況えりとくろそくとく  
くらこきくまくふ遠方をも  
うて能者のがそのやどみそくも  
能者ふわせり  
キキてこうゆ小  
卷まくとだちの舞ふらまじ  
まくとむせの舞ふらまじとくや

ちくわとあがへはぐれられば。いとやかう  
おぼえざれぬふ。をももすもきづぬまうんふ。  
あともうかへ、うねど。いづもとれあ  
タレカナラヌテハサケレド  
イ余ナレ ザマワルク  
サ室アリ。おのたるれやアリ。ちに。よきま  
みそもわくはアリ。やうてアリ。おのこし  
ま。たゞあひすだよアリ。りうちアリ。宴スケニ  
とやをへらまアリ。おんアリ。もとアリ。様  
二アリ。いとわアリ。あアリ。後アリ  
新アリ。造アリ。めアリ。めアリ。めアリ  
磨アリ

二十一〇

秋  
岷江の一本あらわく小舟を  
らきよりむきゆくもたらすやうの船う  
きくさぬをひそてよせるふか  
あんをひくまねハ船を用ひる  
事のまうけぬありゆと  
のまへ、視かざる船へもうち  
こゑとあると  
和  
左大臣より  
わざくお近づねきれどさばとく  
せんりとくわく  
女みくわらあとも  
釋  
帝の御よ

さうすとハム黙後段の女みく  
ちハ母モの内妹あれハ母モを  
あぐの化人ほやかハスヒモシ  
とひき細流尋ゆもかく便せ  
もそれどこれとハ母モの墨奴訓  
のやうふあるをもじこらるむむ  
クキニトハあくべも小梅小右  
太刀の法ひすめけうとあるもじ  
補足よ井へてうがと  
まくれてそ  ひとくじつ  
ろひておちもふれそをとふまく  
むらもよそくくにく住あうま  
たうべー

あらわす。もと  
ゆく。たゞすも。いもあく  
源氏の元す。一日肉アラを吃エサフてはるいめんつりぐれ。  
乗馬ウマ  
ゆめくまひく。どももきぬアマナ、  
もえく。とおがせて。ゆみの宮ミヤへかねを  
まとめゆき。  
大食オカシ  
らふアラフをやう。あづてれもあく、  
タメテタメテ、  
よそヨソ、  
ひく。ひくとあめくと。まく  
生イニシ出ヒダリ  
まちあくもおひづくふたれば。すくちのやうふ。

花のわきは地の上に何をも  
文はうるゝれりとりへてをも  
儀うるおこか藏物ニキシウルの  
ことあはれ事もして是ももも  
ありときハトグリルノアモウル  
あどきの綺と用ひて様のうれ  
きハ面もりきわのみ蘿芳の  
うきをつけてゆるべ  
新号の名ふ様とりかめりて白う  
ら壁あつといとやねくしゆもと  
うじぐ雅亮装束およ上まがひ  
の詠下づきみとて玉うひ表ハ唐  
絶たなきともうへ儒學不深く  
ふのうへあいだらうとつう  
今るの傍比衣のうへとつう  
これゆふべくべきかのとを  
の綺ハ他とて彼のとくとせ  
常あるべりうれりとく事と古の  
事あるべくとくとく用ひれつぐ  
うちやねはあくすくふくらう  
えびざめのトクタのうりう  
抱ちふ裾し裾ハ衣のまこと云く  
西宮記云上賜者直衣下着下襲

〇十三

ちひらやややまきみふ **細** そめく  
明 破く。まよふかとあてりの  
まごれ小社をまよふとする。ハメ  
クの毛あらわらんふある。ア  
あんぐんよ。 **歌** 宴あくす  
母屋の庇う村の毛あらわらじそこ  
ト寝殿のうへゆきまくまの  
戸口へさんるのあた戸口。**義女**  
一毛葉よ一あまと毛もく女三  
院院こ葉ふ余にえすのけ三人  
ひ敵ひのけ復ふ  
**峯** 夏ハ夜及  
の方へちうどをはとあきば様ハあ  
あくたあるう  
神ぐらふどくうれをうもぐて  
**圭** 踏きうの時代に、五音がてく  
こときくめんとうとよじくも  
うひきを一劫云被口と、簾の下よ  
モ女房のきぬれ袖をひは今  
せやも大餐がくの晴の儀式は時  
ゆきぬあり又東よりも袖を表  
あり **邦** ふきりへ相應の字よ  
く富きうふきうふふ不お義  
のうときてあふ弓の結びすと  
のむくややく。ひんぐの戸ぐらふやくと。ト  
居 **格子** みくらしじらぎと。ア  
女房タチナルベシ **上**  
くもくあごく **踏** 歌  
歌をとつねがみて。ワサトカマ  
め見だりてりで **サシ** デ  
者ほやめうりぬがりゆ。ナマヤモ  
アハ **強** りとひく **酒** **強**  
れてりくべよてけり。め  
ヘイコウシテ **カソーカホ**  
ケード **蕉** 隠  
あれり。妻 戸 御簾  
良 **良** ゆうりかくもくはれとりよやくをとんく  
ア、 **所縁** 託

〇十四

その度にかうの結婚は必勝の宴であるがゆえにかくもあつた。それがおまきをめぐらすのやれをいやへる。みやうへんうぢを  
もう喜んでうと 評 おの文よ  
がのこへりたきをあひてあへ更  
きうるもとある一脉をくふ  
ゑじあもとて左毛のものだやせん  
くを延びられる照應ひとせど  
くも彼の太内のひねる。此た  
本のゆかとばまぐるわうじ  
てうち百姓をうむとせよ  
かげもくせりの  
花 伊勢地盤のさく年のやうく  
へやもと葉年中あれ行年中納  
きのとよてわたりうる者の必  
をよみとひりん忠仁公良房  
の名民はすくとらひよきてよ  
あらよ。御下りをかくしてよ  
のゆきと忠仁公よあざく  
くをあそかくさせあらめとほ氏の  
君のうへるるるふようす  
ゆかり 祝此正月の吉日ふと  
けふとゆきのれの御用

〇十五

